

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ロシアの呪文（1）：愛の呪文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 潤子, Fujiwara, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2642

ロシアの呪文（1）：愛の呪文

藤原 潤子

1. はじめに

本連載の目的は、20世紀初頭までに採集されたロシアの古典的な呪文テキストを資料として翻訳紹介すること、および現代ロシアでどのように新たな呪文が創作されているのかを記述することである。

ドイツ・ロマン主義の影響を受けて、ロシア民衆の口頭伝承がロシア・スラヴ的なものの「宝庫」としてインテリ層に「発見」され、民俗学・口頭伝承学が学問として制度的に確立されたのは1840年代のことである（坂内1992:426）。この時期に呪文もロシア文化の古層を反映したものとして、その価値が見いだされるようになり、20世紀初頭までさかんに収集された。本稿で資料として抄訳するのは、この時期に出版された多数のロシア呪文資料のうち信頼性が高く、かつまとまった分量で出版された以下の4件である。

- ① Л.Н.マイコフ『大ロシアの呪文』1869年（Майков 1869）
- ② П.С.エフィメンコ『П.С.エフィメンコが採集したアルハンゲリスク県のロシア人に関する民族学的資料』1877-1878年（Ефименко 1877-1878）
- ③ Г.ポポフ『ロシアの民間医療』1903年（Попов 1903）
- ④ Н.ヴィノグラードフ「呪文、魔除け、救いの祈りなど」1907-1909年（Виноградов 1907-1909）

①は1845年に創設されてロシア各地で民族学的な調査を行っていたロシア帝室地理学協会のアーカイヴ資料や、主に19世紀半ばに出版された地方紙などの定期行物、民族学の本などに記されていた呪文を抜粋しまとめた資料集である。合計372編の呪文が収められており、愛の呪文、結婚の呪文などのように、目的別に分類されている。採集地はロシア各地で、ヨーロッパのみならず、シベリアも含む。

②は1864-1869年にヨーロッパロシア北部のアルハンゲリスク県で行われ

た民族学調査に基づく資料集である。本書には住居や衣服などの物質文化、民間信仰などの精神文化、昔話や英雄叙事詩などのフォークロアと並んで、約250編の呪文が収録されている。これらの呪文には著者が直接聞き取ったもの以外に、アルハンゲリスク県各地から著者の元に送られてきた古い手稿、アルハンゲリスク県の役場のアーカイヴに保存されていた裁判資料、定期刊行物などに掲載された呪文も含まれている。

③は近代医療の普及を妨げる民衆の「迷信」について理解を深めることにより、「迷信」撲滅に役立てようと考えた医者による著作である。病気の原因をめぐるロシア民衆の世界観や様々な民間療法など、当時の民間医療の全体像の記述が目指されており、民間療法のひとつとして161編の治療の呪文が掲載されている。採集地はヨーロッパロシア各地である。

④はヨーロッパロシア北部のコストロマ州とそれに隣接する州でのフィールド調査で採集された約300編の呪文の資料集である。フィールドで得た情報を最大限残すという観点から、呪文を目的別に分類して並べ替えることはせずに、インフォーマントごとに掲載されている。

以上の4件の資料を「伝統的な呪文資料」、そこに掲載されている呪文を「伝統的な呪文」と呼ぶこととする。本連載ではこれら4つの伝統的な呪文資料から、愛の呪文、治療の呪文などのように目的別に呪文を抜粋し、翻訳紹介する（ただし③の資料は民間医療に特化したものであるため、治療の呪文をテーマとする回以外には基本的に登場しない）。第一回の今回は愛の呪文を取り上げる。日本ではロシアの呪文は、ごくわずかな例¹を除いてほぼ紹介されることがないため、本連載が初めてのまとまった量での資料翻訳となる。呪文資料の訳出に先立って解説を行うが、その際、特徴的に見られるモチーフを紹介すると同時に、現代ロシアで新たに創りだされている当該テーマの呪文も合わせて紹介する。

ここで、現代ロシアの呪文をめぐる状況について概説しておきたい。1917年に無神論を掲げたソビエト政権が成立した後、各地で活動していた呪術師たちは迫害を恐れて身を潜めるようになった。また研究も実質的に困難となり、呪文の採集活動は下火になった。しかしソ連時代末期以降、宗教リバイバルの流れの中で呪術リバイバルが起こる。呪術師たちが再び表立って活動を始めると同時に、日常生活に役に立つ知識として実用目的の呪文集を

¹ 井桁（1974：79-85）、藤原（2010）など。左の2件では各10編前後紹介されている。

出版する者が現れ、書店で多数販売されるようになったのである²。以下、これらを「実用呪文集」と呼ぶこととする。本連載の解説では、こうした現代の実用呪文集に掲載されている呪文と、先の4件の資料の呪文との比較を試み、新たな呪文がどのように生み出されているのかについても記述する。

20世紀初頭までに採集された伝統的な呪文の翻訳紹介をするにあたって現代の実用呪文集を取り上げるのは、現在、実用呪文集に収録されている呪文をロシアの伝統的な呪文と信じて利用している者が多数おり、フォークロア化しつつあることが伺われるからである（藤原 2010：206-209；Фудзивара 2004：21-22）。たとえば筆者が2002～2006年にヨーロッパロシア北部のカレリア共和国で呪術に関する調査を行った際にも、この種の本を利用して呪文を唱える人に何度も遭遇した³。また近年のフィールド調査に基づいて、学術資料として呪文集が出版される際には、調査地における実用呪文集の利用状況への驚きや、実用呪文集の影響を極力排して資料集を編纂したことが書かれていることが少なくない⁴。研究者がフォークロア研究誌の紙上でこうした実用呪文集の出現を嘆き、「偽フォークロア書」とであると断罪した例（Кляус 1999：54）もある。すなわち、フォークロア研究者が危機感を覚えるほど、実用呪文集は広く浸透しているのである。

現在、ロシアで出版されている実用呪文集は多数あるが、本連載では圧倒的な知名度と発行部数を誇るナターリヤ・ステパーノヴァの代表作『シベリアの呪術師の呪文』シリーズを資料とする。ステパーノヴァの人物像と活動については拙書（藤原 2010）で述べたので、概略を紹介したい。ステパーノヴァはシベリアのノヴォシビルスク在住の呪術師である。著書の中で本人が語る所によると、高名な呪術師であった母方祖母のもとで七歳の頃から呪術を学んだ。代表作『シベリアの呪術師の呪文』シリーズの基本的なコンセプトは、呪文で人生のさまざまな問題を呪文で解決しようというもので、彼女の考える呪術師養成プログラムに沿って、各巻百編以上の呪文が紹介されている。ステパーノヴァはこれらの呪文を、古くから伝えられてきたロシア民族の知恵であるとして提示しているが、実際には彼女による創作であると考えられる。巻を重ねるうちに、読者からの相談の手紙も頻繁に掲載され

² ソ連時代の呪術をめぐる状況と現代ロシアの呪術リバイバルについて、詳しくは藤原（2010）を参照のこと。

³ その一部については拙稿（Фудзивара 2004；藤原 2010）に記した。

⁴ 例えば Коровашко（1997：8）。

るようになり、ステパーノヴァは解決に必要な呪文を与えるという形で応えるようになった。また各地で活動している呪術師からも、自分の知らない呪文を教えて欲しいと相談が寄せられるようになり、そうした要望にも応えている。こうした読者の相談との相互作用によって、『シベリアの呪術師の呪文』シリーズは新たな呪文が無限に創り出される場となっている。ステパーノヴァの呪文を古くから伝えられてきた本物の呪文と信じる人が多数おり、彼らによって利用され、他の人に伝えられることによって、ステパーノヴァの呪文はフォークロア化しつつある（藤原 2010：190-209）。以上が拙書におけるステパーノヴァについてのまとめである。2022年現在、ステパーノヴァの著作数は300冊以上、公刊した呪文数は1万編以上に上る。

ロシア・フォークロア研究において、呪文テキストの研究は多数あるが、そのテーマは主にロシアの呪文の起源やモチーフ、あるいは呪文に反映されている世界観についての研究が中心であり⁵、現代の実用呪文集は偽フォークロアとして無視されてきた。しかし、人々の間にこれほどまでに浸透している新たな呪文がどのように作られているのかを考えることも、呪文のフォークロアを考える上で重要であろう。本連載では伝統的な呪文と比較しつつステパーノヴァの呪文を紹介することにより、ロシア呪文研究に新たな知見を与えることをめざす。結論を先取りして言うと、ステパーノヴァは巧みに伝統的な呪文のエッセンスを取り入れて、新たな呪文を創り出している。本連載によって、20世紀初頭以前の伝統的な呪文が、現代にどのようによみがえったのかが浮かび上がるだろう。

凡例

・4件の伝統的な呪文資料に掲載されている呪文数は膨大であるため、本連載の翻訳は全訳ではなく抄訳である。テキストの選定にあたっては、解釈が困難なテキスト（脱落の多いテキスト、伝承の過程で書き間違いなどにより意味不明な部分が生じているテキストなど）を除外した上で、主要なモチーフを網羅するように努めた。

・翻訳資料を配列するにあたっては、なるべく似たモチーフの呪文を近くに配するよう努めた。

⁵ これらのテーマでの近年の研究として、例えば Ryan (1999)、Топорков (2005)、Кляус (1997, 2000)、Агапкина (2010)、Агапкина и Топорков (2014)、Юдин (1997)、Толстой (1995-2012) など。

・読みやすいように改行を行ったり、会話にカッコを付けたりするなどの最低限の編集を行った。

・〈〉内は呪文を唱える際に行うべきことなどについての説明である。

・[]内は藤原による補足説明である。

・[...]は省略を示す。

・ある種の感情や状態などが呪文中で物質化・人格化されている場合は、〈焦がれ〉、〈乾き〉などのように〈〉付で記した。

・原典を尊重して、差別語はそのまま残している。

・自分の名前や呪術をかけたい相手の名前を入れるべき箇所は、○○または◎◎で示した。○○としたのは当該箇所が文法的に男性形となっている場合、あるいはコンテキストから男性と推測される場合、◎◎はその逆で女性の場合である。

・愛の呪文の場合、基本的に上記の○○には男性名のみが、◎◎には女性名のみが入る。しかしそれ以外の呪文では、多くの場合、男性・女性どちらも可能である。なぜなら、この区別は呪文の使用者の性別が反映されているに過ぎない場合が多いため、あるいは、男性形によって男女どちらも含む人間一般を指す場合もあるためである。

・名前を入れるべき箇所の前には、原文ではほぼすべての個所で「神の僕なる」という言葉が入っている。しかしそれらをすべて入れると、日本語では煩雑で意味が取りにくくなるため、訳文では省略した。

2. 愛の呪文

愛はロシアの呪文において、かつて今も最もポピュラーなテーマのひとつである。愛の呪文は大きく分けて、愛させる呪文と、愛を冷ます呪文がある。まず、20世紀初頭までの呪文資料における主要なモチーフを見ていきたい。

なお本稿では愛の呪文とは、特定の相手に対して愛させたり、愛を冷ましたりする呪文と定義することとする。不特定多数の異性に好かれたい、良い求婚者があらわれて欲しい、などのように、呪文の唱え手の中で特定の相手が想定されていないような呪文は除外している。

2.1 伝統的な呪文

2.1.1 愛させる呪文

以下は愛させる呪文の一例である。

①<愛する女性に贈る糖蜜菓子に唱える>

②父と子と聖霊の御名において。③私〇〇は祈りを捧げつつ立ちあがり、十字を切りつつ歩き出す、家から扉を抜け、扉から門を抜け、塀を超えて広き野へ。そこで三人の風に、風の三兄弟に祈る。

「④風のモイセイよ、風のルカよ、荒れ狂う風よ、突風よ！ 吹け、吹き荒れよ、世界中を、キリストの民の間を。銅のはんだで◎◎を焼き、乾かせ、私に恋焦がれるように。彼女を私に結びつけよ、心と心を、体と体を、肉と肉を。世界を吹き渡る時に、⑤その強い〈乾き〉を落とすな、水にも、森にも、大地にも、家畜にも、墓にも。水に落とせば水は干上がり、森に落せば森は枯れ、大地に落せば大地は燃え尽き、家畜に落せば家畜は痩せ細り、墓に落とせば骨が墓で飛び跳ねる。⑥〔乾き〕を〕運べ、届け、入れよ、美しき乙女◎◎の白き体に、熱き胸に、情欲に、肉に。⑦美しき乙女が私〇〇なしには生きられず、いてもたってもいられず、一日も、一時も過ごせぬように。私〇〇を想って悲しみ、恋焦がれるように」

広き野に取り持ち女がおり、取り持ち女のそばには⑧レンガのペチカがあり、レンガのペチカの中には1リットル入りの水差しがあり、その水差しではありとあらゆるものが煮えたぎり、燃え、燃え尽き、乾き、ひからびている。このように◎◎も私〇〇への想いに胸をたぎらせ、血を燃やし、身を乾かせ。⑨私〇〇なしには生きられず、いてもたってもいられず、一日も一時も過ごせぬように。私と離れては食べるものも食べられず、飲む物も飲めず、ため息もつけず、祭りにも行けず、風呂にも入れぬように。⑩教会で十字を切るがごとく、我が言葉に鍵をかけ錠を下ろす。父と子と聖霊の御名において、アーメン、アーメン、アーメン。[…] (Майков 1869: No.1)

以下、この呪文の下線部について番号順に解説していきたい。まず、呪文を唱える際にすべきことについての説明である。

①<愛する女性に贈る糖蜜菓子に唱える>

愛させる呪文はこの例のように、呪文をかけたいと思う相手の食べ物か飲み物に唱える、あるいは相手の足跡に唱えることが多い。これにより、相手の体の中で呪文が作用すると考えられている。

次は呪文の出だしである。

②父と子と聖霊の御名において。

ロシアの呪文はキリスト教とそれ以前の異教文化との混合である。民間では、治療などの良い目的で唱えられる呪文は、キリスト教における神の力によって成就すると考えられていることが多い。そのため、愛の呪文のみならずロシアの呪文は全般に、このようにキリスト教の祈りの文句で始まるものが多い。キリスト教的要素を多く含んだ呪文は「祈り」とも呼ばれる。ただし正教会のオフィシャルな立場からは、いかなる呪文も神に背く罪、悪魔的な行為である。出だしとして、他に以下のような例もある。

主よ、祝福し給え。父と子と精霊の御名において。アーメン。(Виноградов 1907: No.37)

主よ、祝福し給え！ 主イエス・キリストよ、神の息子よ、我らを憐れみ給え。アーメン。(Виноградов 1907: No.124)

いずれもキリスト教の祈りの典型的な文句である。

次に、出だしに続く儀礼の描写部分を見ていきたい。この部分では、呪文を唱える者がどのような行為をして、どこに行き、誰に（または何に）出会うのかが語られる。ただし、必ずしも実際にこうした行為が行われるわけではない。多くの場合、こうした言葉を唱えることによって、儀礼を行ったとみなされる。

③私〇〇は祈りを捧げつつ立ちあがり、十字を切りつつ歩き出す、家から扉を抜け、扉から門を抜け、塀を超えて広き野へ。そこで三人の風に、風の三兄弟に祈る。

上記の例では、儀礼において、まず祈りを捧げ、十字を切ったことが語られている。こうした描写も愛の呪文だけでなくロシアの呪文一般に見られるものであり、キリスト教における神の力によって、呪文が効力を発することが期待されている。出かけていった先で誰に出会うのかについては、様々なバリエーションがある。愛の呪文では上記の例のように、風に何かを依頼することが多いので、ここでは風への依頼を含む他の呪文例を示しておきたい。

私〇〇は起き上がり、家から扉を抜け、扉から門を抜け、広き野に、東に、東の方に向かう。そこで七人の兄弟に、七人の荒れ狂う風に出会う。

(Майков 1869: No.3)

私〇〇は祈りを捧げつつ、十字を切りつつ起き上がり、清き十字架で十字を切り、聖母に祈り、お辞儀する。私は門を抜けて通りに出て、広き野へ、広きひろがりへ、東へ、西へ、南へ、北へ向かう。広き野に、広きひろがり十二人の風が、十二人の荒れ狂う風の兄弟がいる。私は十二の兄弟にお辞儀して祈る。(Виноградов 1907: No.124)

私は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出て、広き野に、広きひろがりに向かう。その広き野で、広きひろがり、私は七十の強風と、七十の竜巻と、七十の強風の息子たちと、七十の竜巻の息子たちに出会う。彼らは緑の森の木を根こそぎなぎ倒し、石の洞窟を焼くために、聖なるルーシ⁶へ向かっていた。そこで私〇〇は彼らにお辞儀して祈る。(Ефименко 1877-1878: A1)

一口に風と言っても、様々な風が登場することがわかる。
次の部分では、出会った者に依頼する内容が語られている。

④風のモイセイよ、風のルカよ、荒れ狂う風よ、突風よ！ 吹け、吹き荒れよ、世界中を、キリストの民の間を。銅のはんだで◎◎を焼き、乾かせ、私に恋焦がれるように。その強い〈乾き〉を落とすな、水にも、森にも、大地にも、家畜にも、墓にも。水に落とせば水は干上がり、森に落せば森は枯れ、大地に落せば大地は燃え尽き、家畜に落せば家畜は痩せ細り、墓に落とせば骨が墓で飛び跳ねる。[〈乾き〉を] 運べ、届け、入れよ、美しき乙女◎◎の白き体に

愛させる呪文は別名「乾きの呪文」とも呼ばれる。このように呼ばれるのは、愛させる呪文をかけられると、相手に恋焦がれるあまり、身も心も乾ききって、干上がるように衰弱していくとされるからである。上記の例では「乾き」が持ち運びできる物、相手の体に入れることができる物として物質化さ

⁶ ロシアの古称。

れている。また、水に落とせば水は干上がる、といった表現により、その「乾き」の並外れた威力が強調されている。

愛の呪文では「乾き」と並んで、「焦がれ」や「悲しみ」や「号泣」なども物質化され、愛したいと思う相手の体に送り込まれる。「焦がれ」とは、ロシア語の「トスカー（тоска）」の便宜的な訳で、相手を恋い焦がれる気持ち、あるいは深い憂いを意味する。「焦がれ」は愛の呪文に頻出するため、愛の呪文は「焦がれの呪文」とも呼ばれる。以下が「焦がれ」などが物質化されて登場している例である。

七人の風よ、世界中の後家やみなし子や幼子から焦がれる〈焦がれ〉を集め、美しき乙女◎◎の熱き胸に運べ。(Майков 1869: No.3)

十二人の風の兄弟よ、私○○（あるいは◎◎）の願いを聞き入れ、助け給え。私から〈焦がれ〉と〈悲しみ〉と大いなる〈乾き〉を取り出し、◎◎（または○○）の体に送り込め、彼女が乾き、私○○（あるいは◎◎）に恋焦がれるように（Виноградов 1907: No.124）

「乾き」や「焦がれ」などは物質化されるだけでなく、人格化されて語られることもある。以下がその例である。

広き野で三人の焦がれる〈焦がれ〉と、三人の乾く〈焦がれ〉と、三人の眠らぬ〈焦がれ〉に出会う。(Виноградов 1907: No.45)

青き海に白きアラティル石⁷があり、白きアラティル石の下に三つの板があり、その板の下に三つの焦がれる〈焦がれ〉と、号泣する〈号泣〉がある。私は近づき、深くお辞儀する。「母なる三人の焦がれる〈焦がれ〉と、三人の号泣する〈号泣〉よ、起き上がり給え、自らの燃えさかる炎で乙女◎◎を焼き給え、昼も夜も夜中も、朝焼け時も夕焼け時も。(Майков 1869: No.14)

「焦がれ」について詳細な研究を行ったトポルコフは、人格化される「焦

⁷ ロシアのフォークロアにおいて、世界の中心、大地の臍に位置する、不思議な力を持つとされる石。ラティル石、白き燃ゆる石などとも呼ばれる。

「焦がれ」はロシアの呪文の大きな特徴であること、上記のように「焦がれ」の居場所としてしばしば語られる「板」は棺の板を連想させるものであり、生と死の境界を象徴するものであること、「焦がれ」を送り込まれた者は肉体的にも社会的にも死に近い状態に陥ると考えられていること、また以下の呪文のように家の空間すべてを占める「焦がれ」は棺の中の死者を思わせることを指摘している（Топорков 2005: 153-182）。

朝、私ヴァシーリーは祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出る、門から門を抜け、広き野に、広きひろがり、青き海のほとりに、聖なる島に出る。島には樫の木で作られた新しい家があり、樫の新しい家には壁から壁まで隙間なく板があり、樫の新しい板の上には焦がれる〈焦がれ〉と乾ける〈乾き〉があり、手足を壁に、頭を長椅子にぶつけている。私ヴァシーリーは祈り、請う。（Виноградов 1907: No.56）

次は「乾き」や「焦がれ」をどのように相手の体に送り込むかについての描写である。

⑤〔〈乾き〉を〕運べ、届け、入れよ、美しき乙女◎◎の白き体に、熱き胸に、情欲に、肉に。

このように、「乾き」や「焦がれ」などを入れるべき体の部位をいくつも列挙するのも、愛の呪文に頻繁に見られるモチーフである。より多く体の部位が語られている例として、以下のようなものがある。

母なる三人の〈焦がれ〉よ、入り込み給え、彼女の熱き胸に、肝に、肺に、考えに、想いに、白き顔に、輝く瞳に（Майков 1869: No.14）

三人の焦がれる〈焦がれ〉と、三人の乾く〈焦がれ〉と、三人の眠らぬ〈焦がれ〉は◎◎の上に落ちる、その熱き胸に、柔らかな肺に、黒き肝に、熱き血潮に、理性と知性に、輝く瞳に、体の肉欲に、七十二のすべての関節に、七十二のすべての血管に。（Виноградов 1907: No.45）

鋼の斧で彼女の熱き胸を切り裂き、焦がれる〈焦がれ〉と乾ける〈乾き〉

を入れよ、その熱き血に、肝に、関節に、七十七の関節と小関節と、もうひとつの関節に、七十七の血管に、背骨に。(Майков 1869: No.3)

「七十七の関節」などの表現から、余すところなく体のすべてに「乾き」や「焦がれ」を入れたいという執念が感じられる。

次は、愛の呪文をかけられた人がどのような状態に陥るかを語った部分である。

⑥美しき乙女が私〇〇なしには生きられず、いてもたってもいられず、一日も、一時も過ごせぬように。私〇〇を想って悲しみ、恋焦がれるように」

⑨私〇〇なしには生きられず、いてもたってもいられず、一日も一時も過ごせぬように。私と離れては食べるものも食べられず、飲む物も飲めず、ため息もつけず、祭りにも行けず、風呂にも入れぬように。

このように、抗いがたい感情にとらわれて苦しみもだえることを語るのも、愛させる呪文の典型的なモチーフである。より詳しい例としては以下のようなものがある。

◎◎が私〇〇なしには生きていけず、いてもたってもいられず、飲むことも食べることもできず、言葉を交わすこともできぬように。彼女が私見るたびに、私の声を聞くたびに、彼女の白き体も、熱き胸も、記憶も知性も、黒い肝も、熱い血潮も、骨も血管も、すべての関節も喜ぶように。(Ефименко 1877-1878: A1)

〇〇が◎◎なしには生きていけず、いてもたってもいられず、一時間も、一時も過ごせぬように。乾きに乾け、太陽の照る昼間も、月の照る夜も、月が欠けゆく時も、月が満ちゆく時も、満月の時も、月が見えぬ時も。しおれにしおれろ、太陽の照る昼間も、月の照る夜も、月が欠けゆく時も、月が満ちゆく時も、満月の時も、月が見えぬ時も。(Виноградов 1907: No.41)

次は、火や熱さと関係するモチーフである。

⑧レンガのペチカがあり、レンガのペチカの中には1リットル入りの水差しがあり、その水差しではありとあらゆるものが煮えたぎり、燃え、燃え尽き、乾き、ひからびている。このように◎◎も私〇〇への想いに胸をたぎらせ、血を燃やし、身を乾かせ。

愛させる呪文では燃えるような愛との連想で、火や熱さについてもしばしば言及される。その際には上記のようにペチカ（ロシアの暖炉兼オーブン）が登場することが多い。以下はそのバリエーションである。

広き野には、青き海のほとりに三つの燃えさかるペチカがある——タイルのペチカと鉄のペチカと鋼のペチカが。三つのペチカでは樫の薪が、ヤニを含んだ薪が燃え、燃えさかっている。このように、◎◎の熱き胸も〇〇に恋焦がれて燃え、燃えさかり、溶けよ。(Виноградов 1907: No.37)

私〇〇は森の白き白樺に近づき、白き皮をはぎ、燃えさかるペチカに投げ入れる。この白樺の皮が火の中で焼け、赤々と燃えるように、◎◎の（あるいは〇〇の）胸は私〇〇（または◎◎）に恋焦がれて焼け、赤々と燃えよ、愛の呪術が解かれるまで、とこしえに。(Виноградов 1907: No.122)

熱さを語るモチーフではペチカ以外に、炎のドラゴンや炎の矢、熱い鉄を鍛える鍛冶屋なども登場する。

「炎のドラゴンよ！ 山や谷や、早瀬や錆色の沼や、ワシやミサゴの親子を焼かずに、美しき乙女◎◎を焼き給え、その七十七の関節と七十七の血管と背骨と彼女の情欲に火をつけよ」(Майков 1869: No.7)

「炎の矢よ、どこへ飛んで行くのか？」

「暗き森に、ぬかるむ沼に、湿った木の根に！」

「炎の矢よ、引き返し、私が言うところへ行っておくれ。聖なるルーシに◎◎という名の美しき乙女がいる。彼女の中に入れ、その熱き胸に、黒き肝に、熱き血に、背骨に、甘い唇に、輝く瞳に、黒き眉に、彼女が〔私に〕恋焦がれるように (Майков 1869: No.6 ; Ефименко 1877-

1878: A9⁸)

海には島があり、島には柱があり、柱の上には七十七人の兄弟がいる。彼らは昼も夜も、鋼の矢を鍛えている。私は彼らに密かに頼む。「七十七人の兄弟よ、私に矢を与え給え、どんな矢よりも熱く早い矢を」私はその矢で乙女◎◎を射る、その左胸を、肺を、肝を。(Майков 1869: No.21)

いずれの例からも、相手の心に愛の炎を燃やしたいという願いが伝わってくる。

愛させる呪文では、ここまで述べてきた以外にも様々なメタファーが使われる。以下がその例である。

広き野にいと清らかなる聖母がおられる。聖母が我が子を想って苦しみ、心を痛めるように、◎◎は○○を想って苦しめ、心を痛めよ (Майков 1869: No.10)

西ではヨセフが妻を、聖母を眺め、見つめている。同じようにあの人も私をとこしえに見つめ、眺めよ。(Ефименко 1877-1878: A20)

人々が主の祝日と、聖なるキリストの復活と、教会の鐘の音を待ちわびるように、彼女◎◎は私を待ちわびよ。(Ефименко 1877-1878: A1)

魚が水なしには生きられぬように、○○は◎◎なしには生きられぬ。クマが母なる大地なしには生きられぬように、○○は◎◎なしには生きられぬ。鳥が森なしには生きられぬように、○○は◎◎なしには生きられぬ。幼子が母親なしには生きられぬように、○○は◎◎なしには生きられぬ。この言葉が誰にも止められぬように、○○を◎◎から引き離すことはできぬ。(Виноградов 1907: No.41)

この世のすべてがすばらしいように、彼女にとって私が輝く太陽よりも美

⁸ いくつかの資料で、出典がマイコフとエフィメンコの両方となっている。これは、エフィメンコが自身のフィールド資料を刊行する前に、マイコフがアーカイヴ調査を行い、アーカイヴに保存されていたエフィメンコの資料を先に自身の呪文集に入れて発表したことによる。

しく、明るい月よりも明るくあれ。母が子を恋うるように、彼女は私に恋焦がれよ、その胸は悲しみに沈め。赤ん坊が乳房を恋うるように、彼女は私に恋焦がれよ、その胸は悲しめ。母馬が子馬を、母牛が子牛を恋うるように、彼女は私に恋焦がれよ、その胸は悲しめ。母犬が子犬を、母猫が子猫を恋うるように、彼女が私に恋焦がれよ、その胸は悲しめ。親鴨が小鴨を、雌鶏がひよこを恋うるように[彼女は私に恋焦がれよ]。彼女は食べるものも食べられず、飲むものも飲めず、祭りにも行けず、眠ることもできぬ、一年も、半年も、昼も夜も、一時も、半時も、一分も、半分も」(Майков 1869: No.2)

上記の最初の例のように聖書の出来事に例えるのは、愛の呪文のみならず、ロシアの呪文一般でよく見られる手法である。親子の愛などへの例えからは、求める愛の強さがよく伝わってくる。

次は結びの部分である。

⑩教会で十字を切るがごとく、我が言葉に鍵をかけ錠を下ろす。父と子と聖霊の御名において、アーメン、アーメン、アーメン。

ここでは、唱えた呪文の強さを語る文言とキリスト教の祈りの文句が、セットになって結びの文句となっているが、どちらか一方のみで結びの言葉とすることも多い。出だしと同じく、結びの文句もロシアの呪文全般に共通する。唱えた呪文の強さを語る文言としては、以下のような例もある。

我が言葉よ、固く強くあれ、とこしえに、永久に。固い錠で言葉を閉じ、鍵は水に投げ入れる。(Майков 1869: No.8)

我が言葉よ、固く強くあれ、石よりも鋼よりも。私はおまえたち[言葉]を三十の錠で閉じ、三十の鍵で封じる。我が言葉には過剰も不足もなく、いかなる曲者にも賢者にも変えられぬ。(Майков 1869: No.14)

私は三十の言葉と三十の詩と三十の祈りを唱える。私は三十の錠と三十の鍵で[言葉を]閉じ、その鍵を持ち去る。私は海から海へ行き、その金の鍵を海に投げ込む、あの白き燃ゆる石の下に。この海には誰も近寄れぬ、その水は誰にも飲めぬ、その砂は誰にも食いつくせぬ、あの金の

鍵は誰にも取り出せぬ、私が生きている限り、私が死ぬまで。(Майков 1869: No.2)

我が言葉よ、石よりも鋼よりも強く硬くあれ。我が言葉への鍵は天の高みに、錠は海の深みのクジラの元に。私〇〇を除いて、このクジラは誰にも捕らえられぬ、この錠は誰にも開けられぬ。このクジラを捕らえ、錠を開ける者は、雷に打たれた木さながらとなる。(Майков 1869: No.3)

唱えた呪文を破ることがいかに難しいかが、様々な形で語られている。

以上、愛させる呪文について解説した。ロシアの愛の呪文をギリシャの愛の呪文と比較したトポルコフは、愛を炎に例えるモチーフ、愛の呪文をかけられた人が陥る、食べられない、飲めないなどの状態を語るモチーフ、体の各部を列挙するモチーフなど、両者に多くの共通点があることを指摘する。そしてその理由について、聖書をギリシャ語から古代スラヴ語に翻訳する過程で、ギリシャの愛の呪文の伝統がスラヴ世界に取り入れられたのであろうとしている(Топорков 2005: 121-135)。

2.1.2 愛を冷ます呪文

愛を冷ます呪文には、愛し合うふたりを引き裂くために唱える呪文と、報われない愛に苦しまないために唱える呪文が含まれる。以下は愛し合う二人を引き裂く呪文の例である。

①私〇〇は祈りを捧げず立ち上がり、家から扉を抜けず、玄関から門をくぐらず、十字を切らずに外に出る。広き野に、青い海のほとりに出て、地下の丸太の上に立ち、北を見る、見渡す。②北には氷の島があり、氷の島には氷の家があり、氷の家には氷の壁、氷の床、氷の天井、氷の扉、氷の窓、氷のガラス、氷のペチカ、氷のテーブル、氷の椅子、氷のベッド、氷の布団があり、氷の王がいる。③氷の家の氷のペチカには、ポーランド猫と舶来犬がそっぽを向いて座っている。ポーランド猫とその舶来犬は、顔を合わせれば血が流れるまで引っかきあい、噛みあう。このように〇〇と◎◎もかじりあい、噛みあえ、青あざができるまで、血が流れるまで。どんな時も、どんな瞬間も、〇〇は◎◎を見ることも眺めることもできぬ。どんな時も、どんな瞬間も、◎◎は〇〇を見ることも眺めることもできぬ。④おお、氷の王よ、川や湖や青き海を冷やす

な、凍らせるな！ ○○と◎◎の熱き胸を冷やせ、凍らせ給え。⑮二人が共に食べることも、飲むことも、見つめあうことも、相手を想うことも、考えることもできぬように。○○が◎◎にとって、森の獣より恐ろしく、地を這う蛇より冷酷に感じられるように。○○にとっての◎◎も同じであるように。アーメン、アーメン、アーメン。

<唱えた後、三度唾を吐く> (Виноградов 1907: No.32)。

以下、番号順に解説していきたい。まず、儀礼の描写についてである。

⑪私○○は祈りを捧げず立ち上がり、家から扉を抜かず、玄関から門をくぐらず、十字を切らずに外に出る。

ここでは「祈りを捧げず」と述べて、キリスト教的な儀礼がひっくり返されている。愛し合う者を引き裂くことは呪いであるため、反キリスト教的な文言となっているのである。こうしたモチーフについては、ロシア及び西欧における、悪魔に魂を売る契約についての語りとの類似性が指摘されている (Топорков 2005: 141-144)。

ただし、愛を冷ます呪文が必ず反キリスト教的モチーフとなるわけではない。祈りを捧げ、十字を切ることを述べる呪文もある。また、愛を冷ます呪文のみならず、愛させる呪文でもこのような反キリスト教的モチーフが現れることもある。これは、相手の意思に反して愛させるという行為は呪い的一种である、という考えが存在するからである。反キリスト教的モチーフの例としては、他に以下のようなものがある。ひとつめは愛を冷ます呪文から、あとのふたつは愛させる呪文からの例である。

悪魔の僕なる私○○は祈りを捧げず立ち上がり、十字を切らずに歩き出し、扉から扉を抜け、門から新居の門を抜け、広き野に、悪魔の沼に出る。広き野には小さなモミの木々があり、モミの木の上には四十の四十倍の悪魔がいる。(Майков 1869: No.48)

私は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに外に出て、広き野に向かう。広き野にはリンボクの茂みがあり、茂みには太った女が、サタンの手先がいる。(Майков 1869: No.24; Ефименко 1877-1878: A16)

私は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに外に出る、扉から扉でないところを抜け、門から門でないところを抜け、広き野ではないところに出て、西に背を向けずに立つ。西にはサタンが、残忍なヘロデ王⁹が住んでいる。（Виноградов 1907: No.41）

いずれの例でも、悪魔的な存在と出会ったことが語られている。これらの呪文は悪魔的な力により成就すると考えられているのである。

次に冷たさについての描写である。

②北には氷の島があり、氷の島には氷の家があり、氷の家には氷の壁、氷の床、氷の天井、氷の扉、氷の窓、氷のガラス、氷のペチカ、氷のテーブル、氷の椅子、氷のベッド、氷の布団があり、氷の王がいる。

④おお、氷の王よ、川や湖や青き海を冷やすな、凍らせるな！ ○○と◎◎の熱き胸を冷やせ、凍らせ給え。

愛させる呪文が火や熱さに言及したのとは反対に、冷たさが繰り返し強調されている。

次は、引き裂かれたふたりがどのような態度を取るようになるのか、どのような状態になるのかについての描写である。

③氷の家の氷のペチカには、ポーランド猫と舶来犬がそっぽを向いて座っている。ポーランド猫とその舶来犬は、顔を合わせれば血が流れるまで引っかきあい、噛みあう。このように○○と◎◎もかじりあい、噛みあえ、青あざができるまで、血が流れるまで。どんな時も、どんな瞬間も、○○は◎◎を見ることも眺めることもできぬ。どんな時も、どんな瞬間も、◎◎は○○を見ることも眺めることもできぬ。

⁹ 新約聖書『マタイによる福音書』2章に登場するユダヤの支配者（在位：紀元前37年～紀元前4年）。新たにユダヤの王となる子、すなわちイエス・キリストが生まれたと聞いて、ベツレヘムの2歳以下の男児をすべて殺害させた。ロシアの呪文では悪魔的な存在として扱われ、特に熱病の呪文によく登場する。

⑤二人が共に食べることも、飲むことも、見つめあうことも、相手を想うことも、考えることもできぬように。〇〇が◎◎にとって、森の獣より恐ろしく、地を這う蛇より冷酷に感じられるように。〇〇にとっての◎◎も同じであるように。

このように、強くいがみ合うこと、あるいは一緒にいられないことを語るのは、愛を冷ます呪文の典型的なモチーフである。他に以下のような例がある。

悪魔が水辺を、オオカミが山を歩いている。ふたりが出会うことはなく、互いについて考えることも、想うことも、子をなすことも、愛をささやくこともない。同じように〇〇と◎◎も、互いに想うことも、子をなすことも、愛をささやくこともなく、とこしえに猫と犬のように不仲であれ。(Ефименко 1877-1878: A25)

私〇〇は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに歩きだす、扉から扉を抜けず、門から門を抜けず、畑の穴を抜けて。私は広き野にも、東の方向にも向かわず、日が沈む方を向く。日が沈むところには臭い川が流れ、臭い川には臭い丸木舟が浮かび、臭い丸木舟には大男が乗っていて、その顔は悪魔、肌は緑、目はフクロウ、口はオオカミ、まなごしはクマで、姿は野獣、吐く息は蛇さながら。この大男が怖く恐ろしく、忌まわしく煩わしいように、〇〇は◎◎にとって怖く恐ろしく、忌まわしく煩わしくあれ、昼も夜も、朝も夕も、正午も昼過ぎも、真夜中も真夜中過ぎも、月が欠けゆく時も、満ちゆく時も、月が見えぬ日も、いつの時も、時を超えて。暗き森を走る獣と、広き野を這う蛇のように、〇〇と◎◎が互いを想うことも考えることも、見つめ合うことも、言葉を交わすこともない。殴り合い、ひっかき合い、いがみ合って血が出るまでひっかき合い、会いたくもなくなり、互いを忘れよ、とこしえに、永久に。

(Виноградов 1908: No.73)

ひとつめの例からは互いの無関心さが、ふたつめの例からはどれほど互いが嫌になるかがよく伝わってくる。

愛の呪文は「乾きの呪文」、「焦がれの呪文」とも呼ばれることを述べたが、愛を冷ます呪文は逆に、「乾きを取り去る呪文」、「焦がれを取り去る呪文」

などとも呼ばれる。以下の呪文では、「乾き」や「焦がれ」が体の各部から取り出され、遠くに運び去られることが語られている。

「流れ早き〇〇川よ、私は焦がれる〈焦がれ〉と、泣きわめく〈乾き〉を携え、朝焼け時に三度、夕焼け時に三度、ここへ来て、白き顔を洗う。私の白き顔から泣きわめく〈乾き〉を落とすために、私の熱き胸から焦がれる〈焦がれ〉を落とすために。流れ早き〇〇川よ、早き水の流れと共に運び去り、深き川底に沈め給え。二度と私〇〇のところに戻らぬように」(Майков 1869: No.30)

また、以下は死人に例えて愛を冷まそうとする呪文であるが、こうした死人にあやかる呪文は、愛の呪文のみならずロシアの呪文全般に見られる。

海の大原のブヤンの島¹⁰に柱があり、その柱の上に櫛の霊屋があり、そこに美しき乙女が、〈焦がれ〉の魔女が横たわっている。彼女の血潮はたぎらず、足は動かず、目はあかず、口はひらかず、胸は張り裂けぬ。同じように〇〇の胸も張り裂けず、血潮たぎらず、悶えることも恋焦がれることもない。(Майков 1869: No.32)

他にもさまざまなテキストがあるが、愛の呪文の主なモチーフは以上である。これらの呪文は 20 世紀初頭までは、主に男性によって、自身の恋を成就させるために唱えられていた。このことは呪文テキスト中にある、「神の僕なる私」の語の文法形態からわかる（ただし翻訳では煩雑になるため、「神の僕なる」は省略し、単に「私」としている）¹¹。伝統的な呪文集では多くの呪文で、呪文を唱える「私」は男性であり、「乾き」や「焦がれ」は「美しき乙女」の体に入れられるのである。

2.2 ステパーノヴァの呪文

次に現代の実用呪文集を代表するステパーノヴァの呪文を見ていきたい。

¹⁰ ロシアの呪文や昔話に登場する神話的な島。呪文ではそこで神話的な存在に出会い、望みをかなえてもらう。

¹¹ 17-19 世紀の呪文を分析したトポルコフによると、97 編中 78 編が男性が女性の愛を得るためのものであった (Топорков 2005: 118)。

彼女の本では伝統的な資料と同様、男性が女性の愛を得るために唱える呪文もあるが、圧倒的に多いのが、夫との関係に悩む妻のための呪文である。愛の呪文の主な唱え手が、男性から女性に代わっているのである。伝統的な愛の呪文では、呪文をかける相手として、独身女性を指す「美しき乙女 (красная девица)」という言葉が頻出することから、多くは独身男性が独身女性の愛を得るために唱えていたと推測されるが、ステパーノヴァの本では主に、結婚している男女の関係、あるいは配偶者とその愛人の関係をコントロールすることが目的となっている点も大きな変化である。こうした変化は、ステパーノヴァに大量に寄せられる、夫の浮気についての悩み相談によって起こったものと思われる¹²。以下はステパーノヴァの呪文集における、夫の浮気に悩む妻のための呪文の表題例である。

- 夫を乾かす呪文 (Степанова: т.3, с.89)
- 遊び歩く夫を乾かす呪文 (Степанова: т.3, с.93)
- 夫が浮気しないようにする呪文 (Степанова: т.3, с.94)
- 子どもたちに父親を取り戻す呪文 (Степанова: т.3, с.93)
- 夫に飲ませるミルクに唱える呪文 (Степанова: т.3, с.92)
- 捨てられた妻が夫を呼び戻すための呪文 (Степанова: т.3, с.90-91)
- 夫が妻を憎んで追い出そうとする時の呪文 (Степанова: т.4, с.22)
- 夫が妻を求めるようになる呪文 (Степанова: т.5, с.50-52)
- 夫と愛人を仲たがいさせる呪文 (Степанова: т.9, с.49-50)
- 夫が妻と愛人の両方を愛している場合の呪文 (Степанова: т.10, с.31-33)
- など

こうした新たな愛の呪文のテキストは、しばしば伝統的な愛の呪文のモチーフを使いつつ、テキストの中に「夫」や「妻」などの言葉を挿入することによって作られている。以下の2編がその例である。

父と子と精霊の御名において。
 私は広き野に、広きひろがりに出て、
 七十七の風と七十七の竜巻を呼ぶ、呼び寄せる。
 竜巻と風の兄弟よ、四方八方へ、

¹² 愛と結婚をめぐる妻からの相談は、藤原 (2022) で紹介しているので参照されたい。

地から天まで吹きまわる者よ、
 〈焦がれ〉と〈悲しみ〉を集め給え、
 すべての後家と孤児から、泣く子らと寂しがる母親たちから。
 〈焦がれ〉と〈悲しみ〉を集め、
 ○○の胸に入れ給え。
 〈焦がれ〉と〈悲しみ〉がそこで巣を作り、住み着き、
 とこしえに居ついて、
 彼が私を、
 自らの妻を恋焦がれるように。
 太陽の下でも、月の下でも、
 晴れの日も、雨の日も。(Степанова: т.15, с.8)

夫○○は私なしには安らかに過ごせぬ、
 七年間、彼は眠れず、
 食べることも飲むことも、教会に行くこともできぬ、
 神に祈ることも、おもてを歩くこともできぬ。
 いつも私を、
 自らの妻を想え、
 昼も夜も朝も、
 夜中も。
 幼子が乳房を欲しがるように、
 人々が死者を想って悲しむように、
 夫は私に、自らの妻に恋焦がれよ、
 この世のすべてに興味を失え。
 父と子と精霊の御名において、
 アーメン。(Степанова: т.27, с.93-94)

これらの例では、風が「焦がれ」を集めて相手の体に入れるモチーフ、何をするともできずに相手を想いつづけるモチーフなど、伝統的な呪文のモチーフがふんだんに使われている。これに「妻」、「夫」の語が挿入されることにより、実に自然に夫が妻を愛するようになる呪文となっている。こうした手法は、愛を冷ます呪文についても同じである。以下は、夫と愛人との仲を冷ます呪文である。

広き野に氷のペチカがあり、
氷のペチカの上に猫と犬がいる。
二匹は吠え、噛みつき、目玉をくり抜きあう。
二匹は血を流し、仲良く一緒はいられぬ。
同じように我が夫〇〇は、
◎◎のそばでは凍りつけ。
夫にとって彼女は氷のように冷たくあれ、
私の後ろの氷のペチカのように。
ふたりは争い、ののしり合い、
一時も一緒には過ごせぬ。
夫がナイフを持てば、彼女は斧を持て。
我が呪文に鍵をかける。
鍵は川へ、錠は砂へ。(Степанова: т.24, с.49)

氷が頻出する点、犬と猫が登場する点は伝統を踏襲しつつ、「夫」という語が挿入され、愛人との仲を裂く呪文になっている。

次に、定番モチーフを通常とは違う形にずらして使うことで、新しい呪文が作られている例を紹介したい。以下は肉をかじりとった骨を夫の愛人の家のそばで投げ捨てて唱える呪文である。

父と子と精霊の御名において。
この骨が肉と一緒にいないように、
この家に私の夫はいられぬ、
ここでパンは食べられぬ、水もワインも飲めぬ、
◎◎（愛人の名を入れる）を抱くこともできぬ。(Степанова: т.24, с.51)

伝統的な愛の呪文には、相手に恋焦がれるあまり、食べることも飲むこともできないと語るモチーフがあったが、この呪文ではそれが流用され、浮気相手の家では食べられない、飲めない、という内容となっている。

夫に浮気して欲しくないという妻の気持ちが、より直接的に織り込まれた呪文もある。

我が言葉よ、実現せよ、
今この時から、とこしえに。

私は門から門を抜け、北に向かう。
 北には
 高い石壁の下に
 石レンガがある。
 レンガはぴくりとも動かず、
 起き上がりもせず、誰かの体に乗ることもない。
 同じように私の夫〇〇のモノは
 誰に対しても勃たぬ、
 夫は誰の体にも乗らぬ。
 夫は私の傍では立派な大佐であれ、
 別の女の傍では冷たい死人であれ。
 夫は唾であれ、めくらであれ、
 すべての若い女と年取った女に対して、
 黒髪と栗毛と白髪の女に対して。（Степанова: т.21, с.65）

妻たちのニーズに寄り添って、性的不能にまつわる伝統的な呪文のエッセンスが取り入れられた呪文となっている。性的不能の呪文については、本連載の別の回で詳しく紹介する。

伝統的呪文のところで述べたように、聖書の出来事や死人に例えて願望を述べる手法はロシアの呪文一般でよく見られるが、ステパーノヴァはこうした手法も取り入れて新たな呪文を作っている。

主よ、すべての悪きものを、呪いを取り除き給え、
 我が家から、我が夫から。
 我らがとこしえに
 愛し合い、互いに忘れぬよう、導き給え、
 イブがアダムを愛したように、
 アダムがイブを追って天から地上に降りたように。
 父と子と精霊の御名において。アーメン。（Степанова: т.12, с.115）

死人は棺の中で安らかに横たわり、
 誰かを想って苦しむことも、ため息をつくこともない。
 誰かを想って泣くことも苦しむこともなく、
 誰かを胸に抱きよせることもない。

同じように我が夫〇〇は
◎◎を想って苦しんだり、悲しんだりすることなく、
◎◎にやさしい言葉をかけることもなく、
自らの熱き胸に、
広き胸に抱きよせることもない。(ステパノヴァ: т.21, с.73)

ステパーノヴァはこの他にも、何かに例えて願望を述べるという伝統に乗っとりつつ、自在に新たなメタファーを創り出し、より読者の感性に訴えようと努めている。

糸よ、汝らが縊り合されたように、
私と愛する人は結婚し、結ばれた。
糸よ、汝らが共にいるように、
我らはもとこしえに共にいる。(ステパノヴァ: т.12, с.23)

〇〇は私を愛せよ、
アル中が酒を愛するように、
蛆虫が糞を愛するように、
母が最初の子を愛するように、
母馬が子馬を愛するように。(ステパノヴァ: т.5, с.176)

糞に群がる蛆虫を見ると吐き気がするように、
〇〇は◎◎のことが嫌になる、
あっという間に。(ステパノヴァ: т.28, с.78)

かぶよ、お前がバラの花を咲かせ、
うぐいすのように歌い、甘い蜜の香りを醸さぬ限り、
〇〇は◎◎と一緒ににはなれぬ。
アーメン。(ステパノヴァ: т.12, с.34)

以上、ステパーノヴァが創作した愛の呪文テキストの一部を紹介した。現代のニーズに合わせつつ、たくみに伝統的な要素が利用されており、代々伝えられてきた「本物の呪文」として流通してしまうのもうなずける。例として挙げたのは、主に夫の浮気に悩む妻のための呪文だが、妻の浮気に悩む夫

のための呪文や、その他の呪文もこうした手法で作られている。

ステパーノヴァの本では、伝統的な愛の呪文のモチーフは愛の呪文の枠にとどまらず、別の目的の呪文にも流用されている。以下はその一例で、成人した子どもの心に母親に対する憐れみの気持ちと呼び起こし、子どもが母親を捨てないようにする呪文である。子どもが冷たいと孤独に苦しむ女性からの相談に対してステパーノヴァが与えた呪文で、愛させたいと思う相手に「焦がれ」を送り込むモチーフ、及び親を求める幼子を引き合いに出して「焦がれ」の強さを語るモチーフが流用されている。

天を覆いつくせる者はおらず、
 輝く朝焼けや夕焼けを消せる者はおらず、
 空いっぱい星を数え挙げられる者もおらぬ。
 同じように我が子らは決して、
 私を、自らの母を傷つけぬ、侮辱せぬ、
 悪意を抱かぬ、手を挙げぬ、
 罵らぬ。
 主よ、子どもたちに私への〈焦がれ〉を、
 彼らの母である◎◎への〈焦がれ〉を送り込み給え。
 子どもたちが泣いて乳をせがんだ頃のように、
 私の服の裾をつかんで離さなかった頃のように、
 いつも私の後を追いかけて、
 私の腕から離れなかった頃のように私に焦がれよ。
 私がいなくなれば泣き、戻れば喜び、
 ママ、ママとまとわりついた頃のように私に焦がれよ。
 幼子らにとって私が食べ物であり、飲み物だったように、
 これからもずっと、とこしえに、永久にそうあれ。
 子どもたちは私を恋しがり、
 喜んで私の世話をし、
 ママ、ママと呼んで瞳を見つめ、
 私から離れるな。
 主よ、天上の王よ、
 あなたが自らの母を、聖母を愛するように
 子どもたちは私を大切にせよ。
 我が言葉よ、固く強くあれ。

今この時からとこしえに、永久とわに。アーメン。(Степанова: т.24, с.61)

愛の呪文のモチーフを流用しつつ、相談者の願望や、どんな母親も持っている子どもとの思い出が巧みに呪文の文句に取り入れられていることがわかる。

次の例は、愛を冷ます呪文を流用した断酒の呪文である。互いにいかに憎しみ合うようになるかを語る伝統的なモチーフは、酒がどんなに嫌になるかを語るのに、愛の「焦がれ」を体の各部から取り去る伝統的モチーフは、酒への「焦がれ」を取り去ることを語るのに使われている。

父なるドドン¹³よ、ドドンの聖母よ、
 しらふでいられるよう、〇〇を支え給え。
 酒への〈焦がれ〉を取り去り給え、
 ウォッカに近づけ給うな！ […]
 彼は酒のことを考えぬ、酒に焦がれぬ、
 いつの日も、いつの時も、飲まぬ、宴会に行かぬ。
 彼にとって酒は、
 死人の匂い、
 死んだ犬の匂い、
 ずぶ濡れの雌熊より忌まわしい。
 酒の湖があり、
 湖には悪魔たちと、
 猫と犬とずぶ濡れの雌熊がいる。
 彼らは互いに唾を吐き合い、痰を吐きあい、
 〇〇を酒に近づけぬ。
 この獣らが互いに愛さず、憎み合うように、
 あるいは糞の入った盃を口に運ぶ者がいないように、
 〇〇は酒を憎め。
 酒への「焦がれ」はこの者から去れ、
 すべての生ける髪と死せる髪¹⁴から、
 頭頂から、思考から、息から、

¹³ A.C.プーシキン『金鶏物語』に登場する王の名前 (Юдин 1997: 150)。

¹⁴ 健康な髪と白髪のことか。

肺から、血から、肝から、唾から、
彼の記憶からとこしえに去れ。
我が言葉に鍵をかけ、錠を下ろす。
とこしえに。
アーメン。（ステパノワ：T.10, c.102）

この例では愛の呪文を流用することによって、断酒のイメージが非常に効果的に語られている。

以上のように愛の呪文は現代のニーズに合わせて進化しつつ、そのモチーフは別の目的の呪文の創出ための資源としても使われているのである。

3. 翻訳資料

3.1 愛させる呪文

<愛する女性に贈る糖蜜菓子に唱える>

父と子と聖霊の御名において。私〇〇は祈りを捧げつつ立ちあがり、十字を切りつつ歩き出す、家から扉を抜け、扉から門を抜け、塀を超えて広き野へ。そこで三人の風に、風の三兄弟に祈る。

「風のモイセイよ、風のルカよ、荒れ狂う風よ、突風よ！ 吹け、吹き荒れよ、世界中を、キリストの民の間を。銅のはんだで◎◎を焼き、乾かし給え、私に恋焦がれるように。彼女を私に結びつけよ、心と心を、体と体を、肉と肉を。世界を吹き渡る時に、その強い乾きを落とすな、水にも、森にも、大地にも、家畜にも、墓にも。水に落とせば水は干上がり、森に落せば森は枯れ、大地に落せば大地は燃え尽き、家畜に落せば家畜は痩せ細り、墓に落とせば骨が墓で飛び跳ねる。[乾きを] 運べ、届け、入れよ、美しき乙女◎◎の白き体、熱き胸に、情欲に、肉に。美しき乙女が私〇〇なしには生きられず、いてもたってもいられず、一日も、一時も過ごせぬように。私〇〇を想って悲しみ、恋焦がれるように」

広き野に取り持ち女がおり、取り持ち女のそばにはレンガのペチカがあり、レンガのペチカの中には1リットル入りの水差しがあり、その水差しではありとあらゆるものが煮えたぎり、燃え、燃え尽き、乾き、ひからびている。このように◎◎も私〇〇への想いに胸をたぎらせ、血を燃やし、身を乾かせ。私〇〇なしには生きられず、いてもたってもいられず、一日も一時も過ごせぬように。私と離れては食べるものも食べられず、飲む物も飲めず、ため息もつけず、祭りにも行けず、風呂にも入れぬように。教会で十字を切るがご

とく、我が言葉に鍵をかけ錠を下ろす。父と子と聖霊の御名において、アーメン、アーメン、アーメン。

私は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ歩き出す、家から扉を抜け、扉と門を抜け、塀の向こうの広き野へ。私は三つ辻で風の三兄弟に祈る。

「長男の東風よ、次男の北風よ、末の南風よ！ 〈焦がれ〉と〈乾き〉を◎◎に届けよ。彼女が私〇〇に恋焦がれ、乾くように、私なしには一日も、一時も過ごせぬように。とこしえに、永久とわに。アーメン！」(Майков 1869: No.1)

<飲み物か食べ物に唱える>

父と子と精霊の御名において。私は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出て、広き野に、広きひろがりに向かう。その広き野で、広きひろがり、私は七十の強風と、七十の竜巻と、七十の強風の息子たちと、七十の竜巻の息子たちに出会う。彼らは緑の森の木を根こそぎなぎ倒し、石の洞窟を焼くために、聖なるルーシへ向かっていた。そこで私〇〇は彼らにお辞儀して祈る。

「七十の強風よ、七十の竜巻よ、七十の強風の息子たちよ、七十の竜巻の息子たちよ、聖なるルーシで緑の森の木を根こそぎなぎ倒すな、石の洞窟を焼くな、◎◎を焼きに行き給え、その白き体を、熱き胸を、記憶と理性を、黒き肝を、熱き血潮を、血管と関節を、彼女のすべてを。◎◎が私〇〇なしには生きていけず、いてもたってもいられず、飲むことも食べることもできず、言葉を交わすこともできぬように。彼女が私を見るたびに、私の声を聞くたびに、彼女の白き体も、熱き胸も、記憶も知性も、黒い肝も、熱い血潮も、骨も血管も、すべての関節も喜ぶように。人々が主の祝日と、聖なるキリストの復活と、教会の鐘の音を待ちわびるように、彼女◎◎は私を待ちわびよ。私を見ぬ日や私の声を聞かぬ日には、野で刈られた草のように乾け。水なしには生きられぬように、彼女は私〇〇なしには生きられぬ。この言葉と呪文に言葉の鍵をかける。アーメン、アーメン、アーメン。(Ефименко 1877-1878: A1)

<呪文をかけたいと思う相手に与えるパンやワインなど、またはその人の足跡に唱える>

私〇〇は起き上がり、家から扉を抜け、扉から門を抜け、広き野に、東に、東の方に向かう。そこで七人の兄弟に、七人の荒れ狂う風に出会う。

「七人の兄弟よ、七人の荒れ狂う風よ、どこから来たのか？ どこに向かっているのか？」

「広き野へ、広きひろがりに行くところだ、刈り取られた草や、切り倒された木や、掘り起こされた土を乾かすために」

「七人の風よ、世界中の後家やみなし子や幼子から焦がれる〈焦がれ〉を集め、美しき乙女◎◎の熱き胸に運べ。鋼の斧で彼女の熱き胸を切り裂き、焦がれる〈焦がれ〉と乾ける〈乾き〉を入れよ、その熱き血に、肝に、関節に、七十七の関節と小関節と、もうひとつの関節に、七十七の血管に、背骨に。美しき乙女◎◎が眠っている時も、二十四時間いつも〇〇に恋焦がれ、食べるものも食べられず、飲むものも飲めず、祭りにも行けず、眠ることもできず、暖かい蒸し風呂でスイカズラの灰汁で体を洗うこともできず、やわらかな白樺の枝で体をたたいて温まることもできず¹⁵、涙を流しながら歩くように。◎◎にとって私が、父母よりも親類縁者よりもいとおしく、神の世で月が照らすすべてのものよりも、大粒の真珠よりも、鮮やかなドレスよりも、黄金の財宝よりも愛おしく思えるように」

我が言葉よ、石よりも鋼よりも強く硬くあれ。我が言葉への鍵は天の高みに、錠は海の深みのクジラの元に。私〇〇を除いて、このクジラは誰にも捕らえられぬ、この錠は誰にも開けられぬ。このクジラを捕らえ、錠を開ける者は、雷に打たれた木さながらとなる。(Майков 1869: No.3)

主よ、祝福し給え！ 主イエス・キリストよ、神の息子よ、我らを憐れみ給え。アーメン。私〇〇は祈りを捧げつつ、十字を切りつつ起き上がり、清き十字架で十字を切り、聖母に祈り、お辞儀する。私は門を抜けて通りに出て、広き野へ、広きひろがりへ、東へ、西へ、南へ、北へ向かう。広き野に、広きひろがりには十二人の風が、十二人の荒れ狂う風の兄弟がいる。私は十二の兄弟にお辞儀して祈る。

「十二人の風の兄弟よ、私〇〇（あるいは◎◎）の願いを聞き入れ、助け給え。私から〈焦がれ〉と〈悲しみ〉と大いなる〈乾き〉を取り出し、◎◎（または〇〇）の体に送り込め、彼女が乾き、私〇〇（あるいは◎◎）に恋焦がれるように、[私なしには] 生きられず、飲むことも食べることもできず、死ぬほど恋焦がれ、乾きに苦しみ、風呂で体を洗うことも湯を浴びるこ

¹⁵ ロシアの蒸し風呂では、白樺の枝を束ねたもので体をたたいて血行を良くして温まることが一般的に行われている。

ともできぬように。とこしえに。アーメン。アーメン。アーメン。(Виноградов 1907: No.124)

海の大草原のブヤンの島に三人の兄弟が、風の三兄弟がいる。一番上は北風、二番目は東風、末は西風。「風よ吹け、〈悲しみ〉と〈乾き〉を◎◎に運べ。彼女が○○なしには一日も、一時も過ごせぬように」我が言葉は固い。
(Майков 1869: No.4)

<三つの空焼け——朝焼けと夕焼けと朝焼け——に向かって唱える>

○○を祝福し給え！ ○○は祈りを捧げつつ床に就き、祈りを捧げつつ起き上がり、十字を切りつつ露で顔を洗い、スカーフでぬぐう。私は扉から扉を抜け、門から門を抜け、広き野に、道に、通りに出る。そこで私○○は三兄弟のウスイーニャとポロディーニャとニキータ・マメンチーに出会う。

「三兄弟よ、どこへ行くのか、どこへ向かっているのか？」

「暗き森に、ぬかるむ沼に、流れる川に行くところだ、森を焼き、沼を乾かし、川を止めるために」

「三兄弟よ、暗き森にも、ぬかるむ沼にも、流れる川にも行くな。私○○が言うところへ行け、行ってきておくれ。◎◎のところへ行き、その熱き胸を焼け、私に恋焦がれるように。ペチカで火が熱く熱く燃え、消えぬように、彼女の胸も私への想いに燃えよ。この世のすべてがすばらしいように、彼女にとって私が輝く太陽よりも美しく、明るい月よりも明るくあれ。母が子を恋うるように、彼女は私に恋焦がれよ、その胸は悲しみに沈め。赤ん坊が乳房を恋うるように、彼女は私に恋焦がれよ、その胸は悲しめ。母馬が子馬を、母牛が子牛を恋うるように、彼女は私に恋焦がれよ、その胸は悲しめ。母犬が子犬を、母猫が子猫を恋うるように、彼女が私に恋焦がれよ、その胸は悲しめ。親鴨が小鴨を、雌鶏がひよこを恋うるように[彼女は私に恋焦がれよ]。彼女は食べるものも食べられず、飲むものも飲めず、祭りにも行けず、眠ることもできぬ、一年も、半年も、昼も夜も、一時も、半時も、一分も、半分も」

私○○は三十の言葉と三十の詩と三十の祈りを唱える。大地に白き燃ゆる石があるように、我が言葉と呪文は、七十の骨と、八十の関節と、五十の血管と、雄々しき頭と、輝く瞳と、腕と心臓と踵と膝の血管を貫く¹⁶。私は三

¹⁶ 大地に白き燃ゆる石があることが確かなように、私の呪文が骨などを貫くことも確かであ

十の言葉と三十の詩と三十の祈りを唱える。私は三十の錠と三十の鍵で〔言葉〕閉じ、その鍵を持ち去る。私は海から海へ行き、その金の鍵を海に投げ込む、あの白き燃ゆる石の下に。この海には誰も近寄れぬ、その水は誰にも飲めぬ、その砂は誰にも食いつくせぬ、あの金の鍵は誰にも取り出せぬ、私が生きている限り、私が死ぬまで。（Майков 1869: No.2）

私〇〇は朝早くに祈りを捧げつつ起き上がり、顔を洗って主なる神に祈る。家から扉を抜け、庭から門を抜け、広き野に出る、明るい月の下、瞬く星の下に。広き野で三人の焦がれる〈焦がれ〉と、三人の乾く〈焦がれ〉と、三人の眠らぬ〈焦がれ〉に出会う。三人の焦がれる〈焦がれ〉と、三人の乾く〈焦がれ〉と、三人の眠らぬ〈焦がれ〉は◎◎の上に落ちる、その熱き胸に、柔らかな肺に、黒き肝に、熱き血潮に、理性と知性に、輝く瞳に、体の肉欲に、七十二のすべての関節に、七十二のすべての血管に。かっこうが森で悲し気に鳴き、ひとつの場所にいられず、自分の巣を持たぬように、◎◎は私〇〇に恋焦がれ、いてもたってもいられぬ。薪がペチカで乾き、斧でやつれるように、◎◎は私〇〇に恋焦がれ、いてもたってもいられず、乾き、やつれる、いつの日も、いつの時も、毎分、一時間のうち六十分ずっと。パンと塩なしに人が生きられぬように、◎◎は私〇〇なしに生きてゆけぬ。死人が大地なしには眠れぬように、魚が水なしには生きられぬように、◎◎は私〇〇なしに生きられぬ、これから先、とこしえに、永久に。アーメン、アーメン、アーメン。とこしえに、永久に神を信じて。アーメン、アーメン、アーメン。（Виноградов 1907: No.45）

父と子と精霊の御名において。私〇〇は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出る、家から扉を抜け、庭から門を抜け、広き野に出る。広き野には家があり、家の中には端から端まで板があり、板の上には〈焦がれ〉がいる。私〇〇はその板にお辞儀し、祈る。

「〈焦がれ〉よ、私〇〇のところに来るな、〈焦がれ〉よ、行け、美しき乙女をとらえよ、その輝く瞳を、黒き眉を、熱き胸を。◎◎の熱き胸にたぎる血潮に火をつけよ、私〇〇なしには生きてゆけぬように、いてもたってもいられぬように。私が要塞に¹⁷アーメン、アーメン、アーメン。（Ефименко 1878: A8）

る、との意か。

¹⁷ この呪文が強固で破れないことを述べていると思われる。

朝、私ヴァシーリーは祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出る、門から門を抜け、広き野に、広きひろがりに、青き海のほとりに、聖なる島に出る。島には檜の木で作られた新しい家があり、檜の新しい家には壁から壁まで隙間なく板があり、檜の新しい板の上には焦がれる〈焦がれ〉と乾ける〈乾き〉があり、手足を壁に、頭を長椅子にぶつけている。私ヴァシーリーは祈り、請う。

「焦がれる〈焦がれ〉よ、乾ける〈乾き〉よ、立ち上がり、私の……¹⁸のところへ行って焼き給え、その白き体を、黒き肝を。熱き血を流せ、その七十七の血管から、七十七の関節から、……の骨へ。彼女◎◎は、私ヴァシーリーなしには一日も過ごせぬ、真夜中も朝早くも夜遅くも過ごせぬ。どこで私に気づいても、どこで私の声を聞いても、私に駆け寄れ。飲む物も飲めず、食べる物も食べられず、私ヴァシーリーを想い続けよ。私の呪文はブル石¹⁹よりも強くあれ。錠は海へ、鍵は口へ。(Виноградов 1907: No.56)

<呪文をかけたいと思う相手に与える食べ物か飲み物、またはその人の足跡に唱える>

私〇〇は立ち上がり、扉から扉を抜け、門から門を抜け、東へ、東の方へ向かい、明るい月の元に、主なる神の月の元に、青き海のほとりに、青き海の大海原に出る。この青き海に白きアラティル石があり、白きアラティル石の下に三つの板があり、その板の下に三つの焦がれる〈焦がれ〉と、号泣する〈号泣〉がある。私は近づき、深くお辞儀する。

「母なる三人の焦がれる〈焦がれ〉と、三人の号泣する〈号泣〉よ、起き上がり給え、自らの燃えさかる炎で乙女◎◎を焼き給え、昼も夜も夜中も、朝焼け時も夕焼け時も。母なる三人の〈焦がれ〉よ、入り込み給え、彼女の熱き胸に、肝に、肺に、考えに、想いに、白き顔に、輝く瞳に、〇〇が彼女にとって、この世のすべてより、明るい太陽より、主なる神の月よりも大切に思えるように、彼女が食べるものも食べられず、飲むものも飲めず、祭りにも行けぬように、宴でも、誰かと話している時にも、野でも家でも、彼のことが彼女の頭から離れぬように」

我が言葉よ、固く強くあれ、石よりも鋼よりも。私はおまえたち [言葉] を三十の錠で閉じ、三十の鍵で封じる。我が言葉には過剰も不足もなく、いかなる曲者にも賢者にも変えられぬ。(Майков 1869: No.14)

¹⁸ 原文にもこのように点が打たれている。その後の行にある点も同じ。

¹⁹ どのような石か不明。

<朝焼け時と夕方時に水に3回唱える>

朝焼けのマレミヤーナよ、夕焼けのマレミヤーナよ、私〇〇は汝らに祈り、汝らに求める。私から〈焦がれ〉と〈悲しみ〉と大いなる〈嘆き〉を取り出し給え。我が〈焦がれ〉よ、〈悲しみ〉よ、大いなる〈嘆き〉よ、水や大地や小さな泉に落ちるな、白き熱き石の上に落ちるな、我が〈焦がれ〉よ、〈悲しみ〉よ、大いなる〈嘆き〉よ、◎◎の上に落ちよ、その熱き胸に、熱き血潮に、黒き肝に、百七十の血管に、ふたつの、みっつの、ひとつの背骨に。〈焦がれ〉と大いなる〈悲しみ〉により、彼女が食べるものも食べられず、飲むものも飲めず、祭りにも行けず、着飾ることもできず、[私の]大きな声を聞けば、どこにしようと駆け寄り、あまい口づけをするように。我が言葉に鍵をかけ、錠を下ろす、とこしえに。アーメン。(Виноградов 1907: No.60)

主よ、祝福し給え。父と子と精霊の御名において。アーメン。私は祈りを捧げず床に就き、十字を切らずに起き上がり、扉を抜けずに家を出て、門を抜けずに庭を出て、道でも通りでもないところに行く。私は道と通りを進み、広き野に、青き海のほとりに出る。広き野には、青き海のほとりには、三つの燃えさかるペチカがある——タイルのペチカと鉄のペチカと鋼のペチカが。三つのペチカでは樫の薪が、ヤニを含んだ薪が燃え、燃えさかっている。このように、◎◎の熱き胸も〇〇に恋焦がれて燃え、燃えさかり、溶けよ。〇〇は◎◎なしには生きていけず、いてもたってもいられず、食べることも飲むこともできず、一時も、どんな時も、一分も過ごせぬ。〇〇にとって◎◎は、明るい太陽よりも、輝く月より輝く。〇〇は◎◎がいなくてはクワス²⁰も飲めず、パンも食べられず、熱い風呂小屋で体を洗うこともできぬ。昼も夜も、いつもいつも、毎時間、毎分、どこにいても、[◎◎に恋焦がれて]乾き、しおれよ。我が言葉に鍵をかけ、錠を下ろす、とこしえに、アーメン。アーメン。アーメン。(Виноградов 1907: No.37)

主よ、真のキリストよ、祝福し給え！ 私〇〇は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに外に出る、家から扉を抜けず、門から野原でなく、床の隙間から地下室へ、明るい太陽の沈むところ、明るい月が登るところに出る。私〇〇は森の白き白樺に近づき、白き皮をはぎ、燃えさかるペチカに投げ入れる。この白樺の皮が火の中で焼け、赤々と燃えるように、◎◎の（あるいは

²⁰ ライ麦などを発酵させて作るロシアの伝統的清涼飲料。

〇〇の) 胸は私〇〇 (または◎◎) に恋焦がれて焼け、赤々と燃えよ、愛の呪術が解かれるまで、とこしえに。いつの日も、とこしえに、永久とわに。アーメン。(Виноградов 1907: No.122)

父と子と精霊の御名において、アーメン。ペチカで炎が上がり、薪が赤々と熱く燃えるように、◎◎の胸は〇〇への想いに熱く燃えよ、一日中、どんな時も、いつも、とこしえに、永久とわに、アーメン。(Майков 1869: No.5)

私は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出て、扉から扉を抜け、扉から門を抜け、広き野に出る。西を背にして東に向かい、明るい空を眺め見ると、明るい空から炎の矢が飛んでくる。私はその矢に祈り、請い、尋ねる。

「炎の矢よ、どこへ飛んで行くのか？」

「暗き森に、ぬかるむ沼に、湿った木の根に！」

「炎の矢よ、引き返し、私が言うところへ行っておくれ。聖なるルーシに◎◎という名の美しき乙女がいる。彼女の中に入れ、その熱き胸に、黒き肝に、熱き血に、背骨に、甘い唇に、輝く瞳に、黒き眉に、彼女が[私に]恋焦がれるように、一日中、太陽が出ている時も、朝焼け時も、月が満ち行く時も、寒い風が吹く日も、良い日も、悪い日も、とこしえに」(Майков 1869: No.6 ; Ефименко 1877-1878: A9)

私〇〇は起き上がり、扉から扉を抜け、扉から門を抜け、東へ、海の大海原に向かう。海には島があり、島には柱があり、柱の上には七十七人の兄弟がいる。彼らは昼も夜も、鋼の矢を鍛えている。私は彼らに密かに頼む。

「七十七人の兄弟よ、私に矢を与え給え、どんな矢よりも熱く早い矢を」

私はその矢で乙女◎◎を射る、その左胸を、肺を、肝を。彼女が昼も夜も真夜中も恋焦がれ、食べるものも食べられず、飲む物も飲めぬように。[呪文を]頑丈な錠で閉じ、鍵を水へ投げ入れる。(Майков 1869: No.21)

<呪文をかけたいと思う相手に与える食べ物か飲み物、またはその人の足跡に唱える>

私〇〇は立ち上がり、扉から扉を抜け、門から門を抜け、広き野に、広きひろがりに、青き海のほとりに出る。青き海の大海原のほとりに炎のドラゴンがいて、山や谷や早瀬を焼きに行こうと旅支度をしている。錆色の沼や、

ワシやミサゴの親子、刈り取られた草や切り倒された木を焼こうとしている。私はドラゴンに近づき、深くお辞儀する。

「炎のドラゴンよ！ 山や谷や、早瀬や錆色の沼や、ワシやミサゴの親子を焼かずに、美しき乙女◎◎を焼き給え、その七十七の関節と七十七の血管と背骨と彼女の情欲に火をつけよ。太陽の照る昼も、月の照らす夜も、彼女が〇〇を愛おしみ、欲するように、彼女が〇〇に恋焦がれ、眠るに眠れず、食べるものも食べられず、祭りにも行けぬように。白いカマスが流れる水なしには、...²¹なしには生きられぬように、美しき乙女◎◎は〇〇なしには生きていられず、いてもたってもいられぬ」

我が言葉よ、固く強くあれ、石や鋼よりも、するどいナイフよりも、瞬時に刺さる槍よりも固くあれ。我が言葉に固く鍵をかける。天の高みには、強固な要塞があり、強力な軍勢がいる。鍵はそちらへ、錠は海の深みへ。

(Майков 1869: No.7)

<呪文をかけたいと思う相手に与える食べ物か飲み物、またはその人の足跡に唱える>

私〇〇は立ち上がり、扉から扉を抜け、扉から門を抜け、広き野に出る。そこで私は火と炎と荒れ狂う風に出会う。私は立ち上がり、深くお辞儀して言う。

「火よ、炎よ！ 緑の草地を焼くな、荒れ狂う風よ、炎をあおるな、代わりに私の頼みを聞いておくれ、大切な頼みを。私〇〇から焦がれる〈焦がれ〉と、泣きわめく〈乾き〉を取り出し、海を越え、川を越え、落とさぬように運び、◎◎の中に入れ給え、その白き胸に、熱き心臓に、肺に、肝に。彼女が昼も夜も真夜中も、〇〇を恋焦がれるように、おいしいものも食べられず、蜜酒もビールもワインも飲めぬように」

我が言葉よ、固く強くあれ、とこしえに、^{とわ}永久に。固い錠で言葉を閉じ、鍵は水に投げ入れる。(Майков 1869: No.8)

<朝焼けに向かって唱える>

私◎◎は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出る、扉から扉を抜け、門から門を抜け、広き野に、東に向かう、朝焼けの方に、輝く太陽の下に、若い月の下に、瞬く星の下に。瞬く星の下に白き石の山があり、白

²¹ 一語意味不明。

き石の山からは、燃えさかり、煮えたぎる三つの泉が流れ出る。燃えさかり、煮えたぎる泉のそばにはキリストその人が、天使と大天使と天上の軍勢と共に立つ。誰もが彼らを恐れ、怖がるが、私◎◎は恐れも怖がりもせぬ。私は彼らに、三つの燃えさかる泉の水と、三つの煮えたぎる泉の水を請う、○○のやわらかな肝を、たぎる血を、熱き胸を焼くために、その胸が◎◎に恋焦がれて、とこしえに、永久に煮えたぎり、燃えるように。我が言葉よ、強く硬くあれ、○○のやわらかな肝が、たぎる血が焼けるように、熱き胸が◎◎に恋焦がれて煮えたぎり、燃えさかるように、とこしえに、永久に。○○の熱き胸は◎◎への想いに煮えたぎれ、燃えさかれ、とこしえに、永久に。

(Майков 1869: No.17)

<呪文をかけたいと思う相手に与える食べ物か飲み物、またはその人の足跡に唱える>

私○○は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出て、扉から扉を抜け、門から門を抜け、広き野に出る。広き野にはいと清らかなる聖母がおられる。聖母が我が子を想って苦しみ、心を痛めるように、◎◎は○○を想って苦しめ、心を痛めよ、炎の中にいるように身を焦がせ、生きていることもできず、いてもたってもいられず、飲むことも食べることもできずに。父と子と精霊の御名において。アーメン。(Майков 1869: No.10)

<美しくなるために、あるいはより美しく見えるように、ショールを持って外に出て以下の呪文を唱え、家に戻ってからそれで顔をぬぐう>

私は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ外に出る、家から扉を抜け、庭から門を抜け、大きな通りで東を背に、西を向いて立つ。西ではヨセフが妻を、聖母を眺め、見つめている。同じようにあの人も私をとこしえに見つめ、眺めよ。(Ефименко 1877-1878: A20)

<日の出前の朝焼け時に食べ物に向かって唱え、後でそれを乙女に食べさせる>

私○○は祈りを捧げつつ床に就き、十字を切りつつ起き上がり、朝露で顔を洗い、主なる神が描かれた布でぬぐう。私が扉から扉を抜け、門から門を抜け、広き野に、海辺に、大海原に出ると、四人の天使に出会う。私は天使らにお辞儀する。四人の天使よ、私○○の体から、〈焦がれ〉と〈悲しみ〉を取り出し給え、白き体から、黒き瞳から、すべての血管と関節から、患う部

分から。その〈焦がれ〉と〈悲しみ〉を◎◎の中に入れよ、その白き体に、黒き瞳に、すべての血管と関節に、患う部分に。◎◎が私〇〇に恋焦がれ、決して私を忘れず、飲む物も飲めず、食べる物も食べられず、眠るに眠れず、人と話すこともできぬように。父母にも、兄弟姉妹にも、叔父叔母にも、隣人にも、誰にも目を向けず、ただ私〇〇だけを見つめるように。錠で錠に錠を下ろし、鍵に鍵と最強の言葉で鍵をかける。(Майков 1869: No.18)

<飲み物に唱える>

私は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに外に出る、扉から扉でないところを抜け、門から門でないところを抜け、広き野ではないところに出て、西に背を向けずに立つ。西にはサタンが、残忍なヘロデ王が住んでいる。

「サタンよ、残忍なヘロデ王よ、〇〇に送り給え、三百匹の悪魔と、五十匹の悪魔と、三匹の、二匹の、一匹の忌まわしき悪魔エナハを。おお、忌まわしき悪魔エナハよ、山や谷や大地や水を焼く者よ、黒き眉や白き...²²を焼く者よ、◎◎に恋焦がれるように〇〇を焼き給え、その三百の骨を、五十の肉を、みつつの、ふたつもの、ひとつの血管を、踵の血管と背骨を、〇〇が◎◎なしには生きていけず、いてもたってもいられず、一時間も、一時も過ごせぬように。乾きに乾け、太陽の照る昼間も、月の照る夜も、月が欠けゆく時も、月が満ちゆく時も、満月の時も、月が見えぬ時も。しおれにしおれろ、太陽の照る昼間も、月の照る夜も、月が欠けゆく時も、月が満ちゆく時も、満月の時も、月が見えぬ時も。魚が水なしには生きられぬように、〇〇は◎◎なしには生きられぬ。クマが母なる大地なしには生きられぬように、〇〇は◎◎なしには生きられぬ。鳥が森なしには生きられぬように、〇〇は◎◎なしには生きられぬ。幼子が母親なしには生きられぬように、〇〇は◎◎なしには生きられぬ。この言葉が誰にも止められぬように、〇〇を◎◎から引き離すことはできぬ。この言葉を止め、〇〇を◎◎から引き離せるのは、海の水一滴と、海の砂と、野の草と、森の木の枝の数を数え上げた者のみ。この言葉を止め、〇〇を◎◎から引き離そうとする者の舌は、頭のとっぺんまで伸びよ、目はやぶにらみになれ。我が言葉よ、強く硬くあれ。錠で錠をかけ、錠で錠を下ろす。とこしえに、アーメン。(Виноградов 1907: No.41)

私〇〇は祈りを捧げず立ち上がり、十字を切らずに外に出る、家から扉を抜け

²² 一語意味不明。

ず、玄関から扉を抜かず、庭から門を抜かず、私は身を屈め、地下の丸太の下を、ネズミの巣を、犬の抜け道を、門の下の穴を通り、私ヴァシーリーは広き野に、広きひろがりに、緑の森に出る、明るい太陽の下に、輝く月の下に、またたく星の下に、荒れ狂う風の中に、明るい朝焼け・夕焼けの元に。私ヴァシーリーは鉄のあぜ道で東を背にして、西を向いて立つ。

「母なる大地よ、裂けよ、地獄への道を開け！ 大地から出でよ、百七十人の悪魔よ。3—2—1²³。私ヴァシーリーは一匹の悪魔ソリツァに従い、請う。一匹の悪魔のソリツァよ、1よ、この…²⁴の仕事をして別の世界で成し給え。私ヴァシーリーから〈焦がれ〉と〈乾き〉を落とし給え、その清き白き体から、甘き唇から、うつろな瞳から、百七十の関節から、膝下の血管から、踵の下の皮膚から。〈焦がれ〉と〈乾き〉を小さな銅の釜に入れて運び給え、火の川を越え、火の湖を超えて。こぼさず、ぬらさず、燃やさず、落とさず、アクリーナの体に入れ給え、その胸に、柔らかき肝に、清く白き体に、甘い唇に、うつろな瞳に、百七十の関節に、百七十の膝下の血管に、踵の下の皮膚に、皮膚の下を流れる血に、黒き…²⁵に。その女性の…²⁶から取り出し、私ヴァシーリーの中に入れ給え²⁷。太陽の照る昼も、月の出る夜も、瞬く星の下でも、荒れ狂う風の中でも、明るい朝焼け・夕焼けの元でも、アクリーナが私ヴァシーリーなしには生きていけず、いてもたってもいられぬように。アクリーナが風呂小屋で温まることも、父母に訴えることも、人と話すこともできぬように。アクリーナが眠るに眠れず、食べるに食べられず、飲むに飲めず、タマネギもニンニクも苦いカブも食べられず、ウォッカも飲めぬように」

アクリーナは私ヴァシーリーから離れられぬ。死んだ死人が棺から離れられぬように、私ヴァシーリーからは離れられぬ。この言葉に鍵をかけ、錠を下ろし、海の大海原に鍵を投げ入れる。彼女はとこしえに私ヴァシーリーに恋焦がれよ。…²⁸ (Виноградов 1907: No.55)

私は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに外に出て、広き野に向かう。

²³ 原文にもこの通り書かれており、意味不明。

²⁴ 原文にもこのように記されている。

²⁵ 原文にもこのように記されている。

²⁶ 一語意味不明。

²⁷ ヴァシーリーの体から取った〈焦がれ〉などをアクリーナの体に入れるはずなのに、ここでは逆になっていて矛盾している。

²⁸ 三語意味不明。

広き野にはリンボクの茂みがあり、茂みには太った女が、サタンの手先がいる。

「私は汝、太った女を、サタンの手先を崇め、父母や親類縁者と決別する。太った女よ、美しき乙女の胸を焼き、私〇〇に恋焦がれさせ給え」（Майков 1869: No.24; Ефименко 1877-1878: A16）

<相手に飲ませる物に唱える>

私は祈りを捧げつつ床に就き、祈りを捧げつつ起き上がり、露で顔を洗い、祭壇布でぬぐい、扉から扉を抜け、門から門を抜けて、広き野へ、緑なす海辺に出る。私は潤える大地に立ち、東に明るい太陽が輝き、沼や黒い泥を照りつけるのを見る。同じように◎◎も私〇〇に恋焦がれて乾け、瞳と瞳を、胸と胸を、想いと想いを合わせたいと望め、眠るに眠れず、祭りにも行けずに。この言葉にアーメン。（Майков 1869: No.19）

主イエス・キリストよ、神の息子よ。父と子と精霊の御名において。アーメン。私〇〇（あるいは◎◎）は祈りを捧げつつ床に就き、十字を切りつつ起き上がり、家から扉を抜け、玄関から門を抜け、広き野に、流れ早き川のほとりに出る。流れ早き川のほとりには、春に冠水する草地があり、草地には刈り取られた草があり、神の太陽の下で乾き、しおれている。流れ早き川のほとりの草地の干し草が乾き、しおれるように、◎◎（あるいは〇〇）の胸も乾き、しおれ、痛みを感じ、〇〇（あるいは◎◎）に恋焦がれよ、とこしえに。今からとこしえに、最後の審判の日まで。アーメン。我が言葉は強い。鍵をかけ、錠を下ろす。…²⁹。アーメン。アーメン。アーメン。（Виноградов 1907: No.123）

<まだみずみずしいヴェーニク³⁰から枝を一本とり、愛の呪術をかけたいと思う相手が通る玄関の敷居に置く。相手が枝をまたいだら、それを誰も見られない場所に片づけておく。後でその枝を熱く熱した蒸し風呂小屋に持って入り、腰掛に投げて唱える>

この枝が乾くように、〇〇は私に恋焦がれて乾け。（Ефименко 1877-1878: A14）

²⁹ 二語意味不明。

³⁰ 白樺の枝を束にしたもの。ロシアの蒸し風呂小屋では、この枝の束で体をたたいて温まる。

<「神よ復活し給え」の祈りなどを唱えてから唱える>

主よ、真のキリストよ、祝福し給え。私〇〇は祈りを捧げて十字を切り、広き野に、青き海のほとりに向かう。青き海には海の魚がいる。私は網を投げ入れ、海の魚を捕まえる。海の魚が水なしには苦しむように、◎◎は〇〇がいなければ苦しめ。彼女は[私なしには]一日も過ごせぬ、一晩も過ごせぬ、眠るに眠れぬ、食べるに食べられぬ、飲むに飲めぬ。海で魚と魚が出会うように、◎◎も私と出会い、私から離れず、飽きることなく私を見つめ、飽きることなく私と話し、私を愛せ、いつの日も、とこしえに、永遠に、永久に。アーメン。(Виноградов 1907: No.125)

<青年が鳩を捕まえて殺して、その脂肪を取り出し、それをこね粉にまぜてパンを焼き、以下のように唱えながら愛する女性に食べさせる>

仲睦まじく暮らす鳩のように、◎◎は私を愛せよ。(Майков 1869: No.22)

私〇〇は主なる神に祈る。私〇〇の体で汗が乾くように、◎◎は私〇〇を想って乾け。私の汗が私から離れず、いつも私と共にあるように、◎◎は決して私〇〇から離れず、いつも私と共にいよ、毎日、毎時間、毎分、太陽の照る昼間も、月の照る夜も。骨が体を支えるように、◎◎は私〇〇を支えよ、飽きることなく語り合い、共に歩き、共に食べ、飲み、いつも私〇〇を想い、私のことを考え、私を眺め、見つめよ、瞳をそらすことなく、朝早くにも、夜遅くにも。石の上で泡が沸き立ち、乾くように、◎◎の熱き胸と熱き血潮は私〇〇に恋焦がれて沸き立ち、乾け、毎時間、毎分、忘れることなく私を想え。我が言葉と呪文は固く強い、とこしえに、永久に。アーメン！ アーメン！ アーメン！(Виноградов 1907: No.77)

<男性がしっかり汗をかいた後、その汗をハンカチで拭い、以下のように唱えながら愛する女性にこすりつける>

私の汗がたぎり、燃えるように、彼女の心も私への想いにたぎり、燃えよ。
(Майков 1869: No.23)

〇〇が◎◎を愛するように、◎◎は〇〇を愛せ。彼女は彼なしには生きられず、飲むことも食べることもできぬ。父母よりも、白い月よりも、明るい太陽よりも彼を愛し敬え。とこしえに、永久に、アーメン。(Ефименко 1877-1878: A13)

3.2 愛を冷ます呪文

私〇〇は祈りを捧げず立ち上がり、家から扉を抜けず、玄関から門をくぐらず、十字を切らずに外に出る。広き野に、青い海のほとりに出て、地下の丸太の上に立ち、北を見る、見渡す。北には氷の島があり、氷の島には氷の家があり、氷の家には氷の壁、氷の床、氷の天井、氷の扉、氷の窓、氷のガラス、氷のペチカ、氷のテーブル、氷の椅子、氷のベッド、氷の布団があり、氷の王がいる。氷の家の氷のペチカには、ポーランド猫と舶来犬がそっぽを向いて座っている。ポーランド猫とその舶来犬は、顔を合わせれば血が流れるまで引っかきあい、噛みあう。このように〇〇と◎◎もかじりあい、噛みあえ、青あざができるまで、血が流れるまで。どんな時も、どんな瞬間も、〇〇は◎◎を見ることも眺めることもできぬ。どんな時も、どんな瞬間も、◎◎は〇〇を見ることも眺めることもできぬ。おお、氷の王よ、川や湖や青き海を冷やすな、凍らせるな！ 〇〇と◎◎の熱き胸を冷やせ、凍らせ給え。二人が共に食べることも、飲むことも、見つめあうことも、相手を想うことも、考えることもできぬように。〇〇が◎◎にとって、森の獣より恐ろしく、地を這う蛇より冷酷に感じられるように。〇〇にとっての◎◎も同じであるように。アーメン、アーメン、アーメン。

<唱えた後、三度唾を吐く> (Виноградов 1907: No.32)

父でなく、子でなく、精霊でない御名において。アーメンの反対。

私〇〇は祈りを捧げず起き上がり、十字を切らずに歩きだす、扉から扉を抜けず、門から門を抜けず、畑の穴を抜けて。私は広き野にも、東の方向にも向かわず、日が沈む方を向く。日が沈むところには臭い川が流れ、臭い川には臭い丸木舟が浮かび、臭い丸木舟には大男が乗っていて、その顔は悪魔、肌は緑、目はフクロウ、口はオオカミ、まなざしはクマで、姿は野獣、吐く息は蛇さながら。この大男が怖く恐ろしく、忌まわしく煩わしいように、〇〇は◎◎にとって怖く恐ろしく、忌まわしく煩わしくあれ、昼も夜も、朝も夕も、正午も昼過ぎも、真夜中も真夜中過ぎも、月が欠けゆく時も、満ちゆく時も、月が見えぬ日も、いつの時も、時を超えて。暗き森を走る獣と、広き野を這う蛇のように、〇〇と◎◎が互いを想うことも考えることも、見つめ合うことも、言葉を交わすこともない。殴り合い、ひっかき合い、いがみ合って血が出るまでひっかき合い、会いたくもなくなり、互いを忘れよ、としえに、永久とわに。アーメン、アーメン、アーメン！

<この後、二股の枝をふたつに折り、一方を燃やし、もう一方を次のよう

に唱えながら地面に埋める>

この二本の枝がひとつになることも、出会うこともないように、◎◎と〇〇は永遠に会うことも近づくこともない。(Виноградов 1908: No.73, No.74³¹)

<愛を冷ましたいと思う相手の飲み物か食べ物か足跡に唱える。そして土を一握り取り、その人に向かって投げる>

私が緑の草の中を、るり色の花の中を行くと、魔性の竜巻に出会う。広き野から、忌まわしき力を帯びて、いくつもの海を越え、暗き森を超え、高き山々を越え、広き谷を越えてきた竜巻に。この竜巻が草を打ち、花を折り、投げるように、〇〇も◎◎を打ち、折り、投げ飛ばせ、◎◎を見ることも、近づけることも嫌がれ、恐ろしき蛇よりも忌まわしく感じよ。◎◎は炎と雷と稲妻で焼かれ、燃えよ。この言葉には果ても終わりもなく、過剰も不足もない。(Майков 1869: No.29)

<新郎新婦が口にするワインかスープに三回唱える>

悪魔の僕なる私〇〇は祈りを捧げず立ち上がり、十字を切らずに歩き出し、扉から扉を抜け、門から新居の門を抜け、広き野に、悪魔の沼に出る。広き野には小さなモミの木々があり、モミの木の上には四十の四十倍の悪魔がいる。悪魔の沼には白きラティル石があり、白きラティル石の上にはサタンがいる。私〇〇は白きラティル石に近づき、サタンにお辞儀し、歎願する。

「おお、偉大なるサタンよ、あなた様の力で〇〇と◎◎（夫婦の名前を入れる）を娶せたように、あなた様の力でふたりを別れさせ給え。ふたりが愛し合わず、殴り合い、時にはナイフで刺し合うように。今日、この呪文を唱えた瞬間からとこしえに、私はあなた様の僕、あなた様の手下」(Майков 1869: No.48)

悪魔が水辺を、オオカミが山を歩いている。ふたりが出会うことはなく、互いについて考えることも、想うことも、子をなすことも、愛をささやくこともない。同じように〇〇と◎◎も、互いに想うことも、子をなすことも、愛をささやくこともなく、とこしえに猫と犬のように不仲であれ。

(Ефименко 1877-1878: A25)

³¹ 元の資料では二編の呪文として No.73、No.74 にわかれて掲載されているが、続けて唱えると記されているので一緒に配置した。

海の大海原のブヤンの島に柱があり、その柱の上に櫛の霊屋があり、そこに美しき乙女が、〈焦がれ〉の魔女が横たわっている。彼女の血潮はたぎらず、足は動かず、目はあかず、口はひらかず、胸は張り裂けぬ。同じように〇〇の胸も張り裂けず、血潮たぎらず、悶えることも恋焦がれることもない。アーメン。（Майков 1869: No.32）

私〇〇は祈りを捧げつつ立ち上がり、十字を切りつつ歩き出し、家から扉を抜け、庭から門を抜け、広き野に出る。〇〇が自分の後ろ頭を決して見ぬように、彼は◎◎を憎み、決して視線を向けることはなく、彼女のことを考えることもない。真昼にも夜中にも、早朝にも夜遅くにも、月が欠けゆく時にも、満ちゆく時にも、月の見えぬ日にも。アーメン。（Виноградов 1907: No.108）

〈呪文をかけられるべき人の飲み物か食べ物に唱える〉

私〇〇は立ち上がり、家から扉を抜け、門から門を抜け、流れ早き〇〇川³²で三度顔を洗う。これを朝焼け時に三度、夕焼け時に三度繰り返す、唱える。

「流れ早き〇〇川よ、私は焦がれる〈焦がれ〉と、泣きわめく〈乾き〉を携え、朝焼け時に三度、夕焼け時に三度、ここへ来て、白き顔を洗う。私の白き顔から泣きわめく〈乾き〉を落とすために、私の熱き胸から焦がれる〈焦がれ〉を落とすために。流れ早き〇〇川よ、早き水の流れと共に運び去り、深き川底に沈め給え。二度と私〇〇のところに戻らぬように」

この言葉の最初から最後まで固く鍵をかけ、鍵を水に投げ入れる。
（Майков 1869: No.30）

引用文献

井桁貞敏編著（1974）『ロシア民衆文学 上』三省堂。

坂内徳明（1992）「ロシアにおける民俗学の誕生」『一橋論叢』108(3)、424-444頁。

藤原潤子（2010）『呪われたナターシャ：現代ロシアにおける呪術の民族誌』人文書院。

³² 川の名前を入れる（原注）。

- 藤原潤子 (2022) 「救いの呪文を求めて：ロシアの呪術師ナターリヤ・ステパーノヴァへの悩み相談 (1) 愛と結婚」『なろうど』84、21-37頁。
- Ryan, W.F. (1999) *The Bathhouse at Midnight: An Historical survey of Magic and Divination in Russia*. The Pennsylvania state University Press.
- Агапкина, Т.А. (2010) *Восточнославянские лечебные заговоры в сравнительном освещении. Сюжетика и образ мира*. М.: Индрик.
- Агапкина, Т.А. и А.Л. Топорков (авторы-составители) (2014) *Восточнославянские заговоры: Материалы к функциональному указателю сюжетов и мотивов. аннотированная библиография*. М.: Индрик.
- Виноградов, Н. (1907-1909) *Заговоры, обереги, спасительные молитвы и проч.* // *Живая старина*, 1907, вып. 1-4; 1908, вып. 1-4; 1909, вып. 4, М.
- Ефименко, П.С. (1878) *Материалы по этнографии русского населения Архангельской губернии, собранные П.С. Ефименком*. Ч.2. М.
- Кляус, В.Л. (1997) *Указатель сюжетов и сюжетных ситуаций заговорных текстов восточных и южных славян*. М.:Наследие.
- Кляус, В.Л. (1999) *Публикации русских заговоров 1997-1998 гг.* // *Живая старина* 1(21): 54-55.
- Кляус, В.Л. (2000) *Сюжетика заговорных текстов славян в сравнительном изучении*. М.: Наследие.
- Коровашко, А.В. (сост.) (1997) *Нижегородские заговоры (В записях XIX-XX веков)*. Нижний Новгород.
- Майков, Л.Н. (1869) *Великорусские заклинания. Записки императорского русского географического общества по отделению этнографии* 2, СПб.
- Попов, Г. (1903) *Русская народно-бытовая медицина*. СПб.
- Степанова, Н.И. (1996-2020) *Заговоры сибирской целительницы*. Т.1-52. (本シリーズは何度も再版されており、ページの振り方などに微妙な違いがある。筆者が実際に入手して参照できたのは以下の版である。電子版については「PDF, A4」のようにダウンロードの際のフォーマットを示した：T.1, 1996; T.2, 2003; T.3, 2001; T.4, 2003; T.5, 2003; T.6, 2003; T.7, 2002; T.8, 2002; T.9, 2003; T.10, 2003; T.11, 2003; T.12, 2003; T.13, 2003; T.14, 2003; T.15, 2003; T.16, 2004; T.17, 2005; T.18, 2005; T.19, 2007; T.20, 2006; T.21, PDF, A4; T.22, 2015; T.23, 2014; T.24, 2015; T.25, 2015; T.26, 2013; T.27, 2015; T.28, 2013; T.29, 2011; T.30, 2014; T.31, 2012; T.32, 2012; T.33, 2012; T.34, 2013; T.35, 2013; T.36, 2014; T.37, 2014; T.38, 2014; T.39, 2015; T.40, 2016; T.41,

2016; T.42, 2017; T.43, 2017; T.44, 2017; T.45, 2018; T.46, 2018; T.47, 2018;
T.48, 2019; T.49, 2019; T.50, 2019; T.51, 2020; T.52, 2020.)

Толстой, Н.И. (ред.) (1995-2012) Славянские древности: Этнолингвистический словарь в пяти томах. М.: Международные отношения.

Топорков, А.Л. (2005) Заговоры в русской рукописной традиции XV-XIX вв. М.: Индрик.

Фудзивара, Дзюнко (2004) «Настоящее» и «ненастоящее» в русской магической традиции: Пересмотр фольклорной практики // Живая старина, 2(42): 16-22.

Юдин, А.В. (1997) Ономастикон русских заговоров. Имена собственные в русском магическом фольклоре. М.: Московский общественный научный фонд.

Keywords: ロシア 呪文 フォークロア 伝統 ポスト社会主義